

ご縁

中野和敬

(鹿児島大学多島圏研究センター)

小生は2002年4月3日付けで、丸20年半近くお世話になった鹿児島大学の職を、定年前ではありますけれども、辞すことになりました。この辞職は、自分自身の人生設計として、かねてよりごく身近な人達に公言していた61歳からはどの機関・組織にも属さない自由人でありたいという理想をまことに幸運にも実現できる見通しが立ったまでのことです。ちなみに、今年4月3日は61歳の誕生日の前日にあたります。

小生が鹿児島大学の教授として赴任することになったいきさつを手短かに申し述べますと、1981年の夏休み、現在はすでにすべての公職から引退されている高名なある先生から突然東京の自宅に、設置されたばかりの鹿児島大学南方海域研究センター教授の職に応募してみないかというお誘いの電話があったことに始まります。この研究センターは、メラネシア、ポリネシア、ミクロネシアを研究対象とする地域研究機関であるけれども、設置へ向けて粉骨砕身された先生方は、東南アジアの現地調査経験の豊富な研究者を求めているということでした。当時は現在とは大いに異なり、東南アジアに1年以上滞在して現地調査にたずさわった生態学者は、まだ日本では極めて少なく、小生のように公刊論文数の決して多くはない者でも、初代センター長、



中野和敬 教授

故中尾佐助先生のご尽力のおかげで、なんとか教授として採用されました。

着任してから2ヵ月も経たないうちに、ドックから出てきたばかりの新船がごしま丸(水産学部練習船)に乗って40余名の調査隊員の

この号の内容

ご縁	1
移転記念行事	2
特別講演とシンポジウム	5
定例研究会	6
海外出張・研修の記録	6
研究室紹介	8
出版物	9
お知らせ	9

(2) 多島研だより No. 42

一員としてフィジーへ向け鹿児島島の谷山港から出発しました。この航海では、それまでの大型客船の一等船客としての体験から抱いていた船旅に対するロマンが一遍にうち砕かれ、その生死を賭けた厳しさをいやと言うほど思い知らされました。それ以降かごしま丸には計 5 回、やはり水産学部練習船の敬天丸には計 6 回乗って太平洋熱帯域の島島へ調査に出かけました。勿論そのような一連の調査プロジェクトから得た学問的知見は大変貴重で、大きなものでしたけれども、小生の詳細に見た時のアカデミックな専門分野の性質上、きちっとした論文の素材は同僚のこの上ないご理解のおかげで可能となった現地定着調査によるところの方が大きかったとは言えます。スマトラ島のインド洋側にある西スマトラ州とソロモン諸島マライタ島へは何回も出かけ、現地の村人と毎日居を共にして生態学的調査に従事しました。特に後者については、かご

しま丸に乗って訪れた調査の際、そこが調査地として好適と感じられたことが本格調査開始の発端になったとは申し添えておくべきでしょう。

これまで非常に多くの方のおかげで東南アジアとメラネシアで、自分自身満足できるほど現地調査に従事してきましたが、そうした地域で得た知見を自分のアカデミックな専門分野全体のうちにしっかりと位置づけるという作業はまだほとんど成し遂げていません。主観的に見てまだ体力も気力もそのような目標に立ち向かえる余裕のあるうちに、なんとか充実した達成感の味わえるよう今後しばらくは努力するつもりでおります。

ともかく、20 年以上鹿児島大学に勤務できたご縁に感謝し、多島圏研究センターの順調な発展を衷心より祈りつつ、文字どおり(キーボードではなくとの意味で)筆をおきます。

多島圏研究センター移転記念行事

多島圏研究センターは 10 月上旬に総合教育研究棟 5 階(郡元地区)に引っ越しました。これを祝し平成 13 年 11 月 30 日(金)に新多島研において多島圏研究センター移転記念行事を行いました。

1. 多島圏研究センター施設公開

14 時 30 分より 15 時 30 分まで
法文学部北側、総合教育研究棟 5 階



総合教育研究棟

2. ミクロネシア連邦調査隊写真展

14 時 30 分より
総合教育研究棟 5 階多目的ホール



写真展の様子

3. 移転記念特別講演会「多島域のネットワーク」
15時30分より17時30分まで
総合教育研究棟 203号講義室

“And We Remain, Suffering”
—歌に表われたミクロネシアの戦時史—

Rubinstein, Donald H.

(鹿兒島大学多島圏研究センター)

The War in the Pacific spawned a vast historiography among its American, European, and Asian protagonists, but until recently, the historical accounts of Pacific Islanders caught up in the war have been largely invisible to outsider scholars. This presentation described one example of an Islander history of the war years, in the form of a long epic song, composed and choreographed as a dance performance, from Fais Island in the Yap Outer Islands of western Micronesia.

The song is significant for recording a view of the war from the highly local perspective of Fais Island people. In addition to providing a historical account, the song dramatizes the sense of shock and suffering among the Islanders, and captures some of the complex mixture of protest, anger, and humor that marked Islanders' emotional reactions to events of the war. The song also epitomizes the verbal artistry and poetic structure of this genre of creative expression.

Early in the Japanese era, commercial-grade deposits of calcium phosphate were discovered on Fais. Mining and removal of the deposits began in August 1937, as Japan began stockpiling strategic minerals in preparation for war. Within the next few years, nearly 50 percent of the land was destroyed by strip-mining, beginning with the deepest and most fertile area of garden land on Fais. The events leading up to and surrounding the outbreak of war were the most tumultuous and terrifying time in Fais Islanders' remembered history. The Japanese occupation and destruction of the land, and the subsequent American bombing

and invasion of the island, shattered the Fais people's ancient trust, held since mythological times, that the island provided them a safe refuge from the outside world.

The Fais song is named “Waayel” meaning “Airplane,” which is a central image of the song, symbolizing modern technology and the threatening incursion of the outside world upon the island. The song weaves together two central themes: the aboriginal security and protective isolation of the island on the one hand, and on the other, the shock and suffering brought about by the war's breaching of this security. In its entirety, the song runs about 550 lines, divided into about 30 sections or stanzas, and each stanza describes a different episode of the Fais war experiences.

The song portrays the Islanders as innocent victims of a set of disastrous events set in motion from far away. Tempering this posture of angry protest and victimization is an underlying tone of humor, humanism, and innate optimism. The humor in the song is directed both at the Islanders themselves and at the outsiders who caused their suffering. Nowadays this song continues to be performed in dances on Fais, although only a few islanders are still alive who witnessed the war. Younger generations of Fais Islanders continue to learn the words and movements of the song, while knowing only the haziest details of the actual wartime events behind the song. The song retains its significance as a superlative example of Micronesian verbal art and humor, that transforms suffering into celebration, while reminding future generations of Fais Islanders of their shared history and endurance as a community.

島嶼をつなぐライフ・ヒストリーと親族ネットワーク

—ヤップ州離島の近代への適応戦略—

柄木田 康之

(宇都宮大学国際学部)

(4) 多島研だより No. 42

人口移動研究において、世帯戦略アプローチに加え、ライフ・ヒストリーに注目することで、意思決定モデルと世界システム論という対立したアプローチを媒介することを提唱する。ヤップ州離島で、人々が最も頻繁に移動する契機は、自身あるいは近親者の就学、妊娠、病気の機会である。移動のライフ・ヒストリーからは、公的教育とそれに続く公的雇用にもとづく長期的還流と、医療、親族訪問にもとづく短期的還流という二つのパターンを指摘することができる。人々の移動のパターンは、援助にもとづくヤップ州の教育、医療、公的雇用を核とした社会経済発展を強く反映している。

海域東南アジア東部の歴史地理的世界 —マレー世界と太平洋世界を結ぶ世界—

早瀬晋三

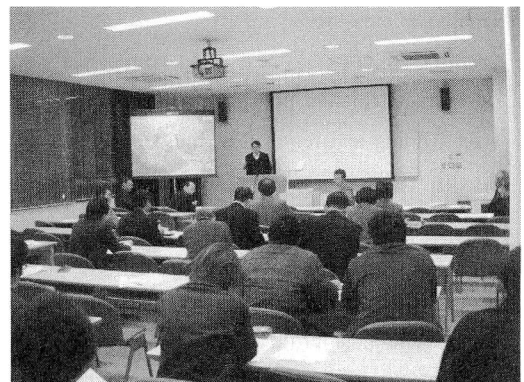
(大阪市立大学大学院文学研究科)

鹿児島大学では、以前より太平洋地域と海域東南アジアを中心に研究が進められてきた。しかし、太平洋世界と海域東南アジア世界を、歴史的に結びつけることは困難だった。文献は乏しく、考古学的な発掘もほとんどおこなわれていなかったからであるが、なによりこれらの世界を結ぶことの意味が十分に認識されていなかった。しかし、グローバル化と地方分権化のなかで、20世紀の近代科学の前提とされた国民国家という枠組みが、意味をもたなくなる現象が出てきている今日、フィリピン、インドネシア、太平洋諸国の個々の国ぐにといった、近代国民国家で分断された地域の研究の見直しが求められるようになった。さらに、歴史学においては、「文献がなければ、歴史はない」とされた実証的文献史学を中心とする近代歴史学を、根本から見直す必要が出てきた。

海域東南アジア東部は、15世紀から本格化する「商業の時代」とともに、イスラーム

とリンガ・フランカとしてのマレー語が広まり、マレー世界が東部にもおよんだと理解されてきた。その結果、繰り込まれた東部の独自性は軽視された。しかし、東部は16-19世紀に交易商人や海洋民の移動によって中心が動き、宗教的にも民族的にも曖昧な歴史地理的世界を築いた。東部世界の独自性・自律性が明らかになると、その要因を太平洋世界とのかかわりから考える必要が生じた。

海域東南アジア東部と太平洋を繋ぐルートは、3つあったと考えられる：1) マカッサルからアンボン、バンダ、さらにオーストラリア北部に至るナマコなどのルート、2) テイドレからニューギニア、さらにメラネシアに至る極楽鳥の羽のルート、3) フィリピン東岸やサンギヘータラウド諸島とマイクロネシアとの関係。この3番目のミンダナオ島東岸とタラウド諸島には、違う死生観をもつ舟棺葬など時代的に復層からなる葬送儀礼がみられる。この地域は、近年になっても太平洋で遭難した日本人が漂着するなど、さまざまな人々の漂着が言い伝えられている。交流や移動文化とは違う漂流文化を考察する可能性を秘めている。



講演会の様子

特別講演とシンポジウム

第 26 回日本熱帯医学会九州支部大会

多島圏研究センターは第 26 回日本熱帯医学会九州支部大会を共催しました。

日 時：2002 年 1 月 26 日（土）～ 27 日（日）

会 場：鹿児島大学稲盛会館

総合テーマ「島嶼地域の諸問題」



2002 年 1 月 26 日（土）

シンポジウムの様子

特別講演 1

- ・ HAM 発症の分子病理（14：00～14：50）

出雲周二（鹿児島大学医学部附属難治性ウイルス疾患研究センター分子病理・遺伝子疫学研究分野）

特別講演 2

- ・ 環境問題と地域づくり（14：50～15：40）

田中健次郎（鹿児島県環境技術協会）

シンポジウム 1：奄美のハブ（16：00～17：40）

- ・ 現状と問題点
服部正策（東京大学医科学研究所奄美病害動物研究施設）
- ・ ハブ毒腺アイソザイムの加速進化
大野素徳（崇城大学工学部応用生命科学科）
- ・ ハブ毒による出血と筋肉壊死（動物実験を中心に）
北野元生（鹿児島大学歯学部口腔病理学）

2002 年 1 月 27 日（日）

シンポジウム 2：南太平洋島嶼の諸問題（9：00～12：00）

- ・ ミクロネシアにおける思春期自殺と社会変化
Donald H. Rubinstein（鹿児島大学多島圏研究センター）
- ・ 太平洋の島々におけるハンセン病
後藤正道（鹿児島大学医学部第 2 病理学）
- ・ 西太平洋地域のデング熱・デング出血熱
森田公一（長崎大学熱帯医学研究所病原体解析部門分子構造解析分野）
- ・ ソロモン諸島のマラリア
石井 明（自治医科大学医動物学）

学生シンポジウム（13：00～15：00）

テーマ：フィールドワーク入門 —熱帯医学を見つめる 2 時間—

多島圏研究センター研究会発表要旨

第27回 2001年9月17日

奄美のアイデンティティをめぐって
—同化と異化の狭間で—

山下欣一

(鹿児島国際大学)

わが国九州と台湾の海洋上に散在する島々のうち、その中央部に位置するのが奄美諸島である。北には、波荒きトカラ海峡を境に喜界島、順次南へ奄美大島・徳之島・沖永良部島と連なり、沖縄本島とは指呼の間に与論島

がある。これらの島々を被覆した歴史の流れは、悲惨というべきで、1609年の薩摩藩・島津氏の琉球征伐により、奄美諸島は、島津氏の直轄地になり、それまでの琉球王府から分離されたのであり、このことは1868年の明治維新において、決定的な影響を与えた。琉球王府関係と比較し、奄美諸島は、なんの配慮もなされずに日本化が実施され、それは様々な矛盾を生んだ。

多島圏研究センター専任・兼務教官の海外出張及び研修記録一覧表 (2001年9月～2002年1月)

所属	氏名	期間	国名	用務
教育学部	八田明夫	2001.9.6-9.11	中華人民共和国	東北師範大学で行われた2001年日中友好科学技術教育シンポジウムへの出席ならびに理科教育に関する講演・研究打ち合わせおよび長春市内大学等視察
農学部	榑下町鉦敏	2001.9.7-9.13	中華人民共和国	日本と中国における農業普及システムの比較研究のための研究打ち合わせおよび現地調査
理学部	鈴木英治	2001.9.10-9.30	ブルネイ	ボルネオ島熱帯雨林の多様性維持機構の研究
農学部	濱名克己	2001.9.11-9.18	カナダ	米国牛病学会参加
農学部	遠城道雄	2001.9.14-9.23	タイ	国際協力農業体験講座引率
農学部	下田代智英	2001.9.14-9.23	タイ	国際協力農業体験講座引率
遺伝子実験施設	田浦 悟	2001.9.18-10.16	ヴェトナム	ヴェトナム・ハノイ農業大学強化計画短期専門家(植物病理学)に係る派遣
歯学部	北野元生	2001.9.20-9.29	イタリア	研究打ち合わせおよび国際学術会議「発がんに関する新しい分子生物学的解析法」出席
水産学部	松岡達郎	2001.9.20-9.30	フィリピン共和国	拠点大学学術交流におけるセミナー等の実施
水産学部	野呂忠秀	2001.9.22-10.2	フィリピン共和国	拠点大学学術交流における共同研究実施

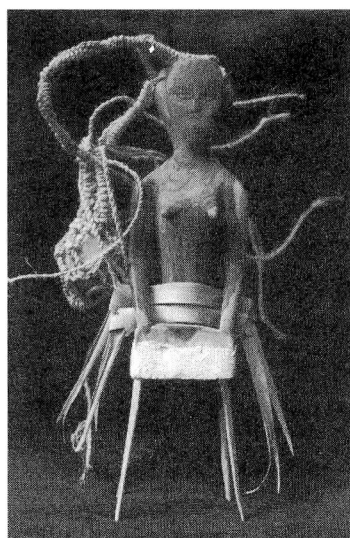
所属	氏名	期間	国名	用務
水産学部	山本智子	2001.9.22- 10.2	フィリピン共和国	拠点大学学術交流における共同研究実施
多島研	青山 亨	2001.10.10- 11.6	ミクロネシア連邦	平成13年度学術調査「多島域における小島嶼の自律性」参加
多島研	河合 溪	2001.10.10- 11.6	ミクロネシア連邦	平成13年度学術調査「多島域における小島嶼の自律性」参加
多島研	中野和敬	2001.10.10- 11.6	ミクロネシア連邦	平成13年度学術調査「多島域における小島嶼の自律性」参加
多島研	野田伸一	2001.10.10- 11.6	ミクロネシア連邦	平成13年度学術調査「多島域における小島嶼の自律性」参加
教育学部	田島康弘	2001.10.10- 11.6	ミクロネシア連邦	平成13年度学術調査「多島域における小島嶼の自律性」参加
農学部	石黒悦爾	2001.10.10- 11.6	ミクロネシア連邦	平成13年度学術調査「多島域における小島嶼の自律性」参加
農学部	一谷勝之	2001.10.10- 11.6	ミクロネシア連邦	平成13年度学術調査「多島域における小島嶼の自律性」参加
農学部	遠城道雄	2001.10.10- 11.6	ミクロネシア連邦	平成13年度学術調査「多島域における小島嶼の自律性」参加
農学部	津田勝男	2001.10.10- 11.6	ミクロネシア連邦	平成13年度学術調査「多島域における小島嶼の自律性」参加
農学部	富永茂人	2001.10.10- 11.6	ミクロネシア連邦	平成13年度学術調査「多島域における小島嶼の自律性」参加
水産学部	寺田竜太	2001.10.10- 11.6	ミクロネシア連邦	平成13年度学術調査「多島域における小島嶼の自律性」参加
水産学部	野呂忠秀	2001.10.10- 11.6	ミクロネシア連邦	平成13年度学術調査「多島域における小島嶼の自律性」参加
水産学部	東 政能	2001.10.10- 11.6	ミクロネシア連邦	平成13年度学術調査「多島域における小島嶼の自律性」参加
理学部	市川敏弘	2001.10.14- 10.21	マレーシア	国際会議出席・発表
法文学部	桑原季雄	2001.10.16- 11.6	ミクロネシア連邦	平成13年度学術調査「多島域における小島嶼の自律性」参加
理学部	根建心具	2001.11.12- 11.24	オーストラリア	地球と生命との共進化に関する調査
理学部	鈴木英治	2001.11.13- 11.20	インドネシア共和国	バリ島山地林についての研究打ち合わせ
工学部	北村良介	2001.11.18- 11.22	フィリピン共和国	JGS（日本地盤工学会）-PGS（フィリピン地盤工学会）合同セミナー出席
水産学部	松岡達郎	2001.11.18- 12.2	タイ・バンコク	拠点大学交流参加およびアジア水産学会での講演
法文学部	新田栄治	2001.12.3- 12.13	タイ・ラオス	科学研究費による現地調査
工学部	北村良介	2001.12.11- 12.16	中華人民共和国	第14回東南アジア地盤工学会議出席
工学部	土田充義	2001.12.14- 12.16	台湾	高雄・台南・台中の廟の視察
法文学部	新田栄治	2001.12.23- 12.28	タイ・ラオス	東北タイおよびラオスの考古学資料収集
農学部	萬田正治	2002.1.29- 2002.2.5	ミャンマー	環境共生プロジェクト視察

研究室紹介

The Micronesian Studies Program at the University of Guam was established in 1994, and is the only area studies program in the United States devoted to Micronesia, including the US Territory of Guam, the US Commonwealth of the Northern Mariana Islands, the three independent nations in free association with the US—the Republic of Palau, the Federated States of Micronesia, and the Republic of the Marshall Islands—and the two independent nations of Nauru and Kiribati. The Micronesian Studies Program awards the Master's Degree to students who have successfully completed the required program of studies, which includes 33 credit hours of course work, a written comprehensive examination on the course work, a written thesis based upon original fieldwork or archival research, and an oral defense of the thesis. Students must also demonstrate an adequate command of a language other than English relevant to Micronesian Studies. Although still fairly new, the Micronesian Studies Program has already produced a strong cohort of students, and several of them have gone on to doctoral studies at prestigious universities in the United States, Europe and Australia. While most of the students are from Guam and other Micronesian islands, the program also has included mainland American, European, and Japanese graduate students. University of Guam faculty members affiliated with the Micronesian Studies Program represent diverse academic disciplines, including anthropology, education, geography, history, library science, philosophy, political science, psychology, public

health, and sociology. Students interested in information on the Micronesian Studies Program at the University of Guam should contact the Dean of Graduate School and Research, University of Guam, Mangilao, Guam 96913 USA, or visit the program's webpage at the University of Guam's website

<http://www.uog.edu/graduate/MA-MICRO.htm>



Navigator's weather amulet (*hoselifay*)
from Woleai Atoll, Yap State

- These double-sided figures, sometimes containing both male and female aspects as this one, are used by navigators as both protection from dangers at sea and sorcery on shore. Carved from wood and adorned with 4 stingray spines and coconut palm fronds, with attached bundle of mineral dye for ritually anointing the figure during use. Approximately 30 cm. in height. -

多島圏研究センターの出版物

南太平洋研究 第22巻1号(2001)

Nobio HIGO: Study on the Pine Reef - II Chronological Changes in Configuration and Fish Aggregation

Yasuhiro TAJIMA: Dabach, New Settlement, Constructed for Outer Islanders of Yap in Micronesia

Motoo KITANO, Masato HIRANO, Makoto YAHATA, Eri UMEMURA, Aichi YOSHIDA, Shosaku HATTORI, Naoko UEDA, Daisuke TSURU, Motonori OHNO: Muscle Necrosis and Regeneration with Lack of Marked Hemorrhage Induced in the Rat After Envenomation of *Trimeresurus flavoviridis* Venom and its Components, Phospholipase A2 Isozymes

南太平洋海域調査研究報告 No.35

海と陸のはざまでの「場所の力」 — 南九州と南の島々からの視座 —

お知らせ

多島圏研究センターは「多島域における小島嶼の自律性」というプロジェクトを現在行っています。(参照：<http://cpi.kagoshima-u.ac.jp/project-overview-j.html>)

平成13年度は、プロジェクトをマイクロネシア連邦ヤップ州ウリシー環礁総合調査として研究を行いました。平成14年5月に調査結果の報告会を行う予定です。調査の様子は<http://cpi.kagoshima-u.ac.jp/yap-gallery-j.html>でごらんになれます。



全調査隊員（ウリシー環礁停泊中の練習船敬天丸にて）

多島研だより No. 42 平成 14 年 3 月 15 日発行

発行：鹿児島大学多島圏研究センター

〒890-8580 鹿児島市郡元 1-21-24

電話 099(285)7394 ファクシミリ 099(285)6197

電子メール tatoken@kuas.kagoshima-u.ac.jp

WWW <http://cpi.kagoshima-u.ac.jp/>